

要旨

本研究の目的は、大学生における展望不安(就職に対する不安)および目標追求行動が、境界例心性に及ぼす影響について検討することであった。近年、大学生を取り巻く就職環境は不透明さを増しており、将来展望の不確実性が青年期の心理的適応に影響を及ぼすことが指摘されている。また、境界例心性における「見捨てられる不安」に関して、目標追求の在り方が土台となり、境界例心性を高める可能性が考えられる。とりわけ、境界例心性は青年期に顕在化しやすい特性であり、就職不安や目標追求の在り方との関連を明らかにすることは、臨床的・実践的意義を有すると考えられた。以上のことから、本研究では「①就職に対する不安が大きい者は、就職に対する不安が小さい者よりも境界例心性傾向が高まるだろう。」「②目標達成において、目標達成方略を調整する傾向にある者は、目標達成方略を調整しない傾向にある者よりも境界例心性傾向が高まるだろう。」「③目標達成において、目標を継続する傾向にある者は、目標を継続しない傾向にある者よりも境界例心性傾向が高まるだろう。」「④就職に対する不安が小さく目標に向かって柔軟かつ持続的に取り組む者は、就職に対する不安が小さく目標に向かって柔軟かつ持続的に取り組まない者よりも境界例心性傾向が下がるだろう。」という4つの仮説を検討した。方法として、大学生を対象に質問紙調査を実施し、展望不安(就職活動不安、職業適正不安、職場不安)、目標追求行動(目標達成方略の調整、目標継続)、および境界例心性を測定した。各尺度得点について度数分布における累積パーセントを基準に高群・低群に分類し、展望不安と目標追求行動を独立変数、境界例心性を従属変数とする二要因の分散分析を行った。その結果、展望不安については平均値全体および全下位因子において主効果が認められ、就職に対する不安が高いほど境界例心性が高まることが示された。一方、目標追求行動については平均値全体および全下位因子において主効果が示されたものの、「②目標達成において、目標達成方略を調整する傾向にある者は、目標達成方略を調整しない傾向にある者よりも境界例心性傾向が高まるだろう。」「③目標達成において、目標を継続する傾向にある者は、目標を継続しない傾向にある者よりも境界例心性傾向が高まるだろう。」という仮説とは反対の主効果が示された。また、就職活動不安および職業適正不安、目標達成方略の調整との間に交互作用が認められ、不安が低くかつ方略調整が高い群においては境界例心性が最も低いことが明らかとなった。この結果から、将来に対する不安は青年期における同一性形成を揺るがし、境界例心性が高まる一方で、目標追求における柔軟な方略調整は心理的安定を支える保護要因となる可能性が示唆された。特に努力を続けることそのものではなく、失敗や困難に応じて方法や手段を調整できることが、境界例心性の低下に寄与すると考えられる。